

武家名目抄 職名部七上 十五十六

和書門			
一六四二五	二三四	二七	類
函	架	冊	

內閣文庫		
一五四二五	二七	和書
冊	架	

內閣文庫	
番號	和 16425
冊數	27 (8)
函號	153 277



武家名目抄第五冊

藏書部五上

奉行人



奉行人可合致其密解之書被違御意於
奉行人全幼少之間如請新書有不決事
頭對押去三年乃其書也河肥事音請所
新書奉書列來新日若領武藏國河肥莊地

溫故堂文庫

奉行人

武家名目抄第十五冊

職名部 五上 五下

淺草文庫



奉行人

吾妻鏡云文治二年七月廿八日癸卯帥中

納言奉書到來新日吉領武藏國河肥莊地

頭對捍去之年乃貢事中河肥事者請所也

但領主幼少之間如請新事有不法事歟差

別奉行人可令致嚴密辨之旨被遣御書於

武藏守之許云、俊兼為奉行

按別本其人云、
と河系地改此

外子乃真と沙汰を命じ者をつけし
いふなり俊兼公幕府此より人なり

又云建久二年正月十五日甲子被行政所

吉書始中公事奉行人前掃部頭藤原朝臣

親能筑後權守同朝臣俊兼前隼人佑三善

朝臣康清文章生同朝臣宣衡民部丞平朝

臣盛時左京進中原朝臣仲業前豐前介清

原真人實俊四年十月廿一日甲寅諸御領乃

真結解勘定事奉行人等於私宅遂其節之

由有風聞之間甚不可然至今日以後者於政

所可致沙汰之旨被仰云、六年十月一日壬

子武藏國以下御公國所課本所乃真事可

致不日沙汰之旨有嚴密仰而今年土民等

愁申損亡事等間定難有合期進濟歟之由

奉行人右衛門尉能員散位行政等申之

同脫漏云、嘉祿元年九月廿日戊寅武

州召集奉行人等令對面給有被仰含事各
賢不肖付而可被加賞罰之由云々
吾妻鏡云文曆元年七月六日仰家司等召
起請是奉行事不謂親疎不論貴賤各存正
儀可致沙汰之趣也其衆十七人前山城守
藤原秀朝前山城守中原盛長散位大江以
康散位三善康持民部大丞三善康連中務
丞大江俊行彈正忠大江以基大膳進大江

盛行左衛門尉惟宗重通兵庫允三善倫忠

藤原頼俊沙弥行忍惟宗行通三善康政改

宗○按此の内三善康連を評定所ありしに除十六人
を評定所よりふるも思ふに改不其人少く是長之後
小不謂引舟底の
云々

新式目云弘安七五引舟底并奉行事右引

付底殊号清潔可勵參奉行人乃廉直致忠
勤志尤可被賞被翫排奸心現私曲者永不可
召仕仍引舟忠否奉事曲直頭人不憚于人

个へトモ多年奉行ノ數ニ加ハリテ末席
ヲ汚ス家ナレハ人ハ定テ筆執ナント侮
テアハ又敵トソ思ヒ給フラニ然トイヘ
トモ我等カ先祖ヲ云ハ利仁將軍ノ氏族
トシテ武畧累葉ノ家業ナリ今某十七代
ノ末孫ニ齋藤伊豫房玄基ト云者ナリ云
云 按之ハ條ノ源
倉殿のまの也
東寺文書云東寺雜掌光信ノ周防國吳和

庄内兼以方乃貢事重辨状如此不意涉下
知并度々寺書云々所遺事以人使者也不
日可被究漏之状依作執達如件康永三年
十二月四日曾我六郎右清門尉殿散位
又云山城國紀伊郡^散茂在田畠 賀来法事為
眼跡
料不明奉々不似所^新置^新畠^新茂^新辰^新一^新丸^新也^新早
市新左清門尉相共可被沙汰付下地之状
依作執達如件貞和四年十二月十八日小

半下野権守殿武藏守 在仍人後
友民部臣

園太曆云文和元年二月廿七日武家奉行

人諏方大進房圓忠来予決断所奉行之時

奉行人也依得舊好時来也 按詔方大進房
之建武一統の時

難辨決り可候しとまのり人より
是利あるは初と又まのり職に補きん也

後愚昧記云貞治五年八月十八日攝州并

若州寺社本所領等事守護未補之間下遣

京都奉行人各一同沙汰付云々

花營三代記云應安四年七月九日石清水

八幡宮三所神殿造營事始公家右中弁藤

原宣方職事權右少弁俊任右大史三善家

連史生官掌武家御使波多野肥後守通緝

奉行人布施彈正大夫入道依田左近大夫

入道中澤掃部大夫入道雅樂左近入道飯

尾美濃守飯尾左近入道雜賀縫殿入道間

真權少外記諏訪左近將監安成新左衛門

尉

按波多野通郷ハ
譯定流ナリ

太平記云

青砥左
衛門條

夫政道ノ為ニ怨ナル者

ハ無礼不忠邪欲功誇大酒遊宴拔折羅傾

城雙六博^博弄剛縁内奏サテハ不直ノ奉行

也治リシ世ニハ是ヲ以テ誡トセシニ

ノ代ノ為體皆是ヲ肝要トス我コソ悪カ

ラ外些礼義ヲモ振舞極信ヲモ立ル人ヲ

ハアテ見ラレヌ人延喜式ヤ又テ氣誥ハ

色代ヤトテ目ヲ引仰ニ倒笑ヒ輕謾ス

又云^{神南合}北ニ當タル峯ニハ大将義詮

朝臣ノ陣ナレハ道譽則祐以下老武者頭

人評定衆奉行人其勢三千餘騎油幕ノ内

ニ布皮ヲ敷キ雙ハ袖ヲ連テ並居夕リ

伊勢家記云應永廿九年正月十一日御評

定始管領有出仕其外頭人奉行人有出仕

建内記云正長二年七月六日奉行人飯尾

肥前守為種為御使入來謁見制札姓尸間
事有被尋下之旨奉行人古來書制札之時
依仰下知如件卜書之次行二年号月日書
之次行二官姓尸判載之五位六位共以如
此規式也而勝定院殿近年仰曰載尸之條
限四品人欵奉行人等書載之不叶道理可
略之由有仰近年不載之頗背先例稱某朝
臣之條四品人事欵若思食_互裁_哉然而不及

申直之仍當御代各可被任先規哉由奉行
等申管領之處可披露之由被申之間今日
為種伺申之處可否面々可尋申由有仰一
紙可注獻云々後日一紙注愚意付為種子
六位外記成上宣旨時畧尸欵事相尋常定
之處先規略尸云々久安案文寫送之五位
外記必載尸也記錄所文殿勘文五位以上
載尸六位略尸案文等一見了

東寺文書云

延 除案

東寺領當國所大奉

幣米奉先々為免除之地旨奉沙奉書如此

可被止留從々由作也仍執達如件永享元

十二月十五日山城國大奉幣米大使山中

左湖門督久後

判○按源倉敷より以本ちり

後々多々ハまひとの

建内記云永享十一年六月廿五日辛丑傳

聞武家諸奉行人愁訴雖經數年不及披

露近日雖訴之或稱管領命越次第披露之

不可然不依尊卑親踈任次第可伺申由有

仰云々又聞諸家被尋有愁訴人云々

康富記云嘉吉二年八月廿八日丙辰或語

云飯尾肥前入道永祥者評定衆也去廿二

日御評定始日與頭人波多野出雲守座席

令相論也為評定衆上者任位階上首可著

頭人出頭上之由肥前申之出雲申云雖為

衆為奉行人之間不可著頭人上候間可著
肥前上之由出雲守募申之於去廿二日者
出雲守著肥前上云々今日之事兩方及對
論所詮任位階上首為衆者可著頭人上之
條有支證之間諸奉行一味同心申此子細
候云々仍出雲守俄一級吏被執申今日著
肥前入道上云々三年四月十三日戊戌一
昨日松尾國祭也於東寺西邊神幸時駕輿

丁神人等及喧嘩數十人手負死人在之仍
神輿或射立矢血氣穢神輿摠而六基也悉
奉振弃路次田頭云々然間今日奉行飯尾
肥前入道永同加賀入道真妙齋藤上野介基
等檢使參向奉檢知之三基觸穢之由歸參
申管領畠山殿云々按波多野出雲守八評定元々
引有頭人を帯きよとの也飯尾犯
入道頭人を帯せきり有評定元
々々ありありきり人との也
文安年中御番帳云奉行元松田治部齋藤

諏訪中澤清飯尾布施茨木雜賀評定元枿
津波多野二階堂町野

蜷川家記云敬白起請文事一御成敷之願

万一不叶理波子細存之志不貽心庶言上

仕於當座雖不存考有思案仕出之旨考不

謂遠期之申止之但至堅固不每誠度志非

沙汰之限事次就公事不可存無沙汰事一

雖為他人奉行請裁許之篇同相遠之由承

及志可申披之台對中沙汰奉行人中之

事身就沙汰之事右友條令遠祀志日本國

中夫小神祇八幡大菩薩山王二十一社天

後大自在天神御壽者可罷蒙仍起請文

如伴長祿二年五月十八日左清門尉三言

為瀨民部丞及京親基右清門尉及原種基

左清門尉之旨元連散位之旨貞有和泉守

清原貞秀河内守及京國通散位之旨之種

加賀守之旨之清沙弥妙令丹波前司平秀
真^與沙弥玄良下野前司之旨貞基下總前司
之旨為教沙弥常忍 以上十五
人悉在判
新撰長祿寬正記云 寬正二 同年九月十一日都二
王土一揆財コリ所々寺社領其外富久心
人民ノ家へ乱入放火シテ財寶ヲウハヒ
トル時ノ奉行飯尾左衛門大夫布施下野
守承リ所司代多賀豊後守ニ被仰付テ是

ヲ退治セシトス
蜷川親元記云文明十七年八月十五日癸
巳奉命出仕飯尾大和入道清俊申入道
赤坂大藏入道清式部大夫飯尾貞澄入道
飯尾左衛門大夫飯方信濃守松田前馬守
飯尾与三左衛門尉松田左衛門大夫飯尾
三郎右衛門尉松田前馬孫三郎飯尾新左
衛門尉 以上十
前元 清前未系元矢野長門入道

治部四部左衛門源方源次郎依田中勢丞
飯尾右京亮清四郎雜賀善次松田八郎源
茂四郎源茂民部丞飯尾又六飯尾亮次郎
源方次郎飯尾源六飯尾加賀四郎
元と一系と政所同注所乃あ寄人なり但引付元
不補せししふ者もいふと恩賞方不加さるる
尚此列にあはしと多くあ寄人
なり其中ハ案末の按中との趣あり

宣秀卿記云御教書崇明應六年三月十三
日除目下仍三ヶ夜分中略以上四千足右用

脚者為節會想用内其露寺米納言元長傳卿

奏名遣切并下仍武家奉以源方大夫將監
也

和長卿記云文龜三年九月十四日參室町
殿其子細者公領左衛門府領田内船岡田
地七段事當年九月西郷三河入道号馬上
免掠申給御下知之間以左衛門督為廣申
入子細之處被聞食披即被成御下知畢自

義昭將軍諸段附之奉行元祿方信濃守晴
 長飯尾加賀守盛就飯尾右馬助貞遠頭方
 神之湖尉俊郷松田九郎左衛門尉頼長二
 階堂山城守晴泰波多野彦五郎通秀大鍬
 上総介氏虎一色七郎勝貴竹田梅松軒者
 波宮内大輔國任 後号坂田○按二階堂波多野ハ
 代々評定元の家多し此の時幕府
衰微し〜ふし職を設けき〜あるての奉行の中に
 連あり〜也又松津氏ハ此の家よりし上り此の家ありと此
 頃を〜し〜京師〜あり〜ある〜ふ〜あり〜此月〜竹
 田者此のあしハまりのあり〜あり〜た〜あり〜

見也

常照愚草云奉行元を右筆方と申事ハ其の
 と申事法大后也又新事法其のと云事ハ
 左々右筆方と申事一宮の法也門付方又
 評定元ハ其百加ハ一段の事也

撫治治要云凡事ハ人ハ天下ハ公事と云は
 公事職なるより〜改道乃吾恩も〜
 こと〜心正〜私哉存

世に黒白を以てまじりて文章は違へて理法は同一の
きく員員を以てあつらんをよめまひ人と称
すべしこれあやうくあやまらば何らんまひ人を
またのく免しつゝもふらうとふあし一貞永
式目々のきられ結ぶてあやうく支流を以て合究
決せられく理あるあし法あつて是をわたり
乃陰人として中絶法を以てせんたの別て罷
科を處せられしはらんやまひ人とし

存知しあつてそのあやうく被處せんとす大なる
裁度ありしは又一まひ人とし員員を
以てあやうくしつゝあやうく公事たる
と裁許をたてし中絶法を以て答へるる
あつてそのあやうくあやうく人傍輩をかへら
れ婿をあつて理を論じんと返り口惜む
しは法めまひを以てしをき中別人
付く海法裁いたるを事とて停止せしふと

いふも時を志すこの事よある人いふも
内奏浪縁をいふもたの意^事支中へき事たる
了又法人の愁に緩急にさるはれむか
しくオケ目さるる庭中をいふたつき制法
ありよしとて理運の海江よりいたるくま
いふも不見たむ道成中はさるる一況や一所
正命の地人のさるるもあつて人輩におか
明日を期せざる存命也いふくか慈悲の心を

いふもあつてさるたれさる人や不詮親疎を
論さる理水もいふもく私の終極もあつ
ま公方け振瑾とさるる系格り正法もいふ
せもさる人子於る別して除時の勅賞もい
ふもして後昆の忠勤をさるる免らるるきむをや
世鏡抄云奉行之支萬事ニ我欲ヲ離テ為
君欲ナク理ニハ理ヲ添ヘ非ニハ非ヲ添
日貧ト福ト理非ヲ以テ同ハ貧ニ付ヨ但

非大儀十ヲハ不及力私ニ小ニ以詞扶之
謀叛人ノ末十リトモ度々忠アラハ召出
セ忠勤ノ侍十リ共度々不忠アラハ追篋
テ不用之可誅也去ハ故人去ク奸臣在朝
忠臣不進庭美女在國惡女恠夫ト去リ智
者在朝家則愚人必讒訴スト去ヘリ相構
相構可守之也
按已上廿四條多是利
將軍家ノ事ハ人カモ
花營三代記去應安四年十二月卅日門真

權少外記被加召関東奉行訖

香取大祢宜文書云下總國香取社社人長

房實云等ト當社領香取郡大概郷内神田

畠等事任所教書法事書ク旨心名之庫大

史入及相共莅彼西沙治付下地於長房等

依年仍後此以件應安七年十月十四日沙

汰道澈雅同文章沙汰智兼雅避後條ク一

實持實秋跡自作田并不替事一夫雜没事

一法神官訴仁散立地半分事一死亡逃亡
跡事一國之事職并良田町事一地頭知事
内不勢去任先例嚴密可令沙汰社家事右
於國之事職去避後中社家去句後不可成
遠乱煩俗仍避出此件應安七年十月十四日
武部延政氏判以避出使對重書施了書
云關東奉行入安富大元入及心名之庫大史入及
應安七年裏封了○按及藏ハ安富入及智兼心名
入及も里又政氏ハ心名
家の代友圓城古氏なり

東本末

空華日用工夫集云應安四年二月十四日
聞官使奉行明石泊泊侍所入圓覺首坐寮捕
僧二人而皈云々
又云至德三年三月二日關東奉行明石將
監書至蓋傳幕府之命也
頼印僧正繪詞云義政禪僧ヲモツテ兩將
へ申テ云某降ヲユルサレハ出家シテ大
衣ヲ著スヘシ然ハ若犬九カ出仕ヲユル

サルヘシヤ兩將出仕シテ此ヨシ披露信
用セラレストイヘトモ布施入道得悦ヲ
奉行トシテ御教書ヲナサレ
東亂記云持氏鎌倉へ上杉安房守數万ノ
軍勢ヲ引率同四日上州ヲ打立同月十號
日ニ分陪川原ニ著玉ハ御旗本ノ人ニ
御内外様ノ侍奉行頭人ニ至ル下テ公方
ヲ捨置申憲實ノ勢ヘシ馳加ニル十四日

鎌倉年中行事云奉行人數六人壹岐明石

布施雜賀清吉岡

按此七條を鎌倉
公方家の事ハ人知

官地論云御使給報書急立飯捧政親御前
槻橋三位房參御前畏讀上鳥秦嶺雲橫藍
關雪擁無往復之使處青鳥飛來投一芳札
高顧之至珍重々々雖為多端令省略候畢
誠恐誠惶敬白林鐘上旬八日富樫御奉行
中木越磯部判

赤松記云永正十四年三月七日由屋形横山志也ん
成以るなりけき中而了由緒不悉以る則可
被返下事ト以トもめ一横山女儀トて以る
連々作くりろけらま以る先言田をか一
下るふへきふくま時の三を以志水孫左衛門
清実衣笠左京亮胡親掃橋豊後了則言以三判
亦く永正十六年七月におれ以
按本書及
信長記了
いふ多ハ諸事おを以を合して稱する名ト多ト有す
多を以といへる職を三人定まると由ト常尔其

三を以るとも一なり下なる
口を以るを以かといふ多の略れ同し

信長記云 信長公 尾張國ノ守護ハ武衛ト

申奉ル數代相繼テ彼國ノ刺史ニ備リ玉
ノ其頃ハ尾張ハ郡ヲ半分ニシテ上四郡
ヲハ織田伊勢守信安守テ岩倉ト云所ニ
在城ス下四郡ハ織田大和守下知ニ隨ヒ
シカハ清洲城ニ武衛公ヲ居申我身モ城
中ニ在テ守護ニ奉ル彼大和守下ニテ三

奉行卜云三八織田因幡守同藤左衛門尉
同彈正忠也

賀越鬪諍記云

御所様濃州御越條

爰ニ義秋將軍濃

州織田上總介信長卜被仰合濃州へ御越

可被成ニ付永祿十一年七月十六日ニ

乘ノ谷ヲ出御ナル去レハ此信長殿卜申

ハ武衛ノ御内衆ニテ古ハ越前ニ在國

有ニカ尾張國ノ奉行四人ニ被仰付ニ其

一人也

又云

於棗莊太窪濱犬追物條

永祿四年四月六日ニ朝

倉左衛門督義景棗ノ莊依太窪犬追物有

之

中略

時ノ奉行同名玄蕃助景連ハ河尻

道場ニ居セラル次日屋形へ出仕了ル

安土日記云天正二年三月十二日信長御

上洛十七日坂本へ被成御渡海相國寺始

テ御寄宿南都東大寺蘭奢待御所望旨帝

王御奏聞之處忝_レ則三月廿六日御勅
使_リ翌日廿七日信長奈良之多門_ニ至
_テ被進御座御奉行人塙九郎左衛門菅屋
九右衛門佐久間右衛門柴田修理亮丹羽
五郎左衛門蜂屋兵庫頭荒木攝津守夕庵
友閑重御奉行津田坊_上以三月廿八日辰刻
御藏開候訖
水戸藥王院文書云就今夜天台宗与真言宗

絹衣_上在_レ信長使僧中道院_上則_レ修理
林示裏_一中入_レ處去年七月彼真言宗申出
給_レ者奏聞_上遠_レ子細_レ絹衣_上用_レ信長
更_ニ勅許_レ標申條為曲事_上次_レ申_レ院被
成_レ沙汰_レ并_レ破_レ下_レ給_レ者_上申_レ院處
信長為_レ公事_上法度_上申_レ定_レ事_上人_上以_レ事_上而
了_レ歷_レ沙汰_レ之_上先_レ辨_レ院_上之_上趣_レ為_レ意_上得_レ深_レ字
也七月三日江戸藥王院_上從_レ青蓮院_上及

按て天正三年
此文書なり

沙陽殿上日記云天正三年七月廿四日
まいるてんるれ事いんのちやうおの
のまのゆゑ大工はるやはる八月四日
五人はゆゑは所まてまいるてんるれ
のくゝのまゝつゝゝ給言れ案ともまゝ
ゆゑゝらるゝ

安土日記云天正七年十二月廿二日親王

様二條新御所へ御移徙トシテ行啓云々
奉行村井長門守丹羽五郎左衛門長岡兵
部大輔惟任日向守也次ノ日信長被仰金銀其
外進上候也

勢州軍記云諸將會合而欲立信長嗣先立
兩大將信雄者移清洲城尾州八郡諸士属
之信孝移岐阜城美濃八郡諸士属之以柴
田羽柴丹羽池田四將為奉行也勢州者松

諫ふ身くハ吾氣をこころに法事有姿を好
よのたりくくをきりし定免後人若回徳善院
主以淺野彈正少弼増田右衛門尉石田治部少輔
長束大藏大輔くく申す

豊臣記云五奉行ヲ被定天下ノ政ヲ執シ
ハ其一ニハ徳善院僧正玄以ニニ淺野彈
正少弼長政三ニ増田右衛門尉長盛四ニ
石田治部少輔三成五ニ長束大藏大輔正

家也中ニモ玄以ハ元来叡山ノ出家ナリ
シカ古城之介信忠公ニ咫尺申テ出頭無
雙御寂期ノ時モ若君ノコトヲ御頼ミイ
カニモシテ守立申様ニ御生害ノ御供ニ
參シヨリハ此事一大事也ト細クト被仰
付シカハ無力安土へ被下若君ニ付テ被
居シヲ元ヨリ才智學徳ノ聞エ有テ
丹州龜山ヲ五萬石被下奉行ノ上座タラ

シメ寺社ノコトヲ司下リ候ヘトナリ又
淺野彈正ハ殿下ノ御縁者ト云當家骨肉
ノ臣ナレハ禁裏仙洞ノ事務並ニ奥方ノ
裁判ヲセヨト也増田石田ハ殿下江州長
濱ヨリ近侍シテ朝暮勤奉公ノ舊功ヲ積
殊ニハ智勇兼備ノ聞エ世以賞美セシカ
ハ立身無滯シテ金吾ハ和州郡山ノ二
萬石被下礼部ハ江州佐和山ヲ十九萬石

被下其上兩人共ニ二十萬石充ノ御預地
ヲ被仰付此二人ハ諸大名ノ取次天下ノ
法政ヲ司リ候ヘトナリ長束ハ元ハ丹羽
越前守ノ家老ナリシカ長秀死後ニ子息
長重國ヲ減セラレシ時大府ハ直參ニ被
召出長束ハ算勘ノ工夫世ニ勝レ且學材
アレハトテ奉行ノ列ニ入ラル諸國郡邑
ノ廣狹天下ノ損益等ノコトヲ考ヘ候ヘ

ト也然レトモ公莫沙汰世莫トモ五人連
判可仕ト被仰付ケリ
天正事録云御花見ノ次第御催夥ニキ様
躰也略中惣構ニ柵ヲ幾重モ結路次通ニ埒
ヲ結群集ノ莫ナル故惣構ヨリ町へ御奉
行人増田右衛門尉初トシテ被仰付
按此
條元親百ヶ條等ありて
信吉百ヶ
條也

清正記云 清正朝鮮乃 加茂山西朝鮮國乃 都へ

をトシ免於勢を由つへきと評定ト逗留此
より秀吉公清名代字嘉多字相秀家英ノ
石田治部少輔増田右衛門尉大谷刑部少輔
の外日本勢為陣と加茂山西秀家へ参候ト
帝王とらへ中へき人故乃多と伺中より秀
家英公とをり夜中より多と候高廉乃帝王と
生捕と候ありて居候と候りしりて居支

とお定らるる
加へられそかり永く
を仍の職を帯せり
按大谷吉隆ハととハ在仍其列了兵
らるるを朝鮮出軍乃期に依りて

増補家忠日記云慶長五年七月大神君ヨ

リ御書ヲ義光ニ賜ル急度申入候治部少
輔以才覺方々一觸状ヲ廻ニ付而雜說申
候條御働之義先深ハ御無用ニ候從此方
重テ様子可申入候大坂ノ儀ハ手置等堅

申付候此方ト一所ニ候後三奉行之書状
為披見進候恐惶謹言

朝倉敏景十七ヶ條云一於朝倉ノ家宿老
を不マ定テ身ハ恙用忠良小ヨリクマ申付
之事一代ノ持来ム方々々々恙用ノ人小
國英亦在仍職被預問矣事

武田信玄百ヶ條云公事出沙汰場後在仍
人之外不可致披露况於落忌ノ儀亦若又

未出沙汰場へ以前者雖為まけ人々外不
及禁之款

甲陽軍鑑之 吾惡の儀大身 職ととも公事

沙汰のすけきと物とよみおれありてい

うみと意也やまらうなふ人乃まきこや

思へと一年原美濃守と云大劉法のあ

人小職と作をいと乞る石思職と十一年

我ホ計 我少許い北浪らと名沙汰あふ不法自これ

原美濃殿何者あぬまは仕立也然とつとも

此人公事小切いととらうくの境目武士

道乃所用いととらうくとらうくとらうと

哲二三月と職定いとらぬ事美濃殿に

公事乃理篇批判致も人あきとの儀を信言

公事と支儀いととらうくとらうくとらうと

由良家傳記云家中沙汰度書いと事法奉行

人番隊組隊いととらうくとらうくとらうと

長曾我部元親百ヶ條云一國中七郡之内三人
奉^儀相定上者彼奉^儀中身義^儀法事不可及
異^儀事身存^儀所^儀三^儀唐屋相定^儀上者万事觸
渡唐毛取不可存後事一國中法之事^儀成
寄親へお理^儀以其^儀上^儀言^儀上^儀考親^儀号^儀在^儀者^儀行^儀
是^儀中^儀唐屋^儀一^儀走^儀考^儀事^儀著^儀法^儀材^儀本^儀出^儀号^儀時^儀
發^儀知^儀事^儀行^儀へ^儀不^儀相^儀唐^儀攻^儀号^儀知^儀可^儀不^儀放^儀在^儀他^儀
國へ^儀走^儀公^儀志^儀親^儀類^儀可^儀成^儀敗^儀同^儀被^儀受^儀在^儀走^儀公^儀

其之人之増倍之可懸科事一給^儀没^儀上^儀志^儀
奉行中へ相理^儀以其^儀上^儀有^儀欲^儀可^儀引^儀出^儀急^儀用^儀之^儀
時^儀も^儀中^儀軍^儀没^儀之^儀外^儀も^儀人^儀數^儀お^儀多^儀可^儀勤^儀在^儀
引^儀へ^儀号^儀る^儀遠^儀理^儀上^儀没^儀之^儀引^儀出^儀何^儀換^儀之^儀事^儀外^儀に^儀一人^儀を^儀
二人^儀引^儀事^儀停^儀止^儀之^儀事^儀一^儀他^儀國^儀へ^儀上^儀下^儀有^儀出^儀入^儀
之^儀事^儀在^儀引^儀人^儀在^儀老^儀中^儀判^儀形^儀之^儀志^儀浦^儀之^儀心^儀
一切^儀不可^儀通^儀少^儀之^儀其^儀所^儀在^儀智^儀浦^儀之^儀刀^儀銘^儀定^儀
是^儀上^儀も^儀若^儀後^儀中^儀付^儀根^儀出^儀入^儀少^儀即^儀時^儀在^儀者^儀之^儀

友人を招ぶてその職を充てしめてそれ
職を世に傳へて其の職を以て其の職を以て
連長に引付るを致すに及して其の職を
人の補を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て

を以て人とははきこりて其の職を以て
中身の各階級にありて其の職を以て
席に列たりて其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て
其の職を以て其の職を以て其の職を以て

以て是利敵の時ふむりても多くは徳名のま
行人のついでにその子孫をゆとのくけ敵
補さしけしは職名も亦に准據たりし
を認めしすく時時よ海法をく事
あるはけし業の過さそそれなり又えらる
事其らの過制なり 但此事のみあり
け制よあり 凡そ
永享の頃より弘安のころ人といふを常と
なりとむいふを常たりしを過るは後よ

にありた互しと人といふものこまを向く
事となすり 又此は
い 人の用よ此家の名
あま美名の二名ありむあふとつふま
清評を娘名ゆは法娘等に此家の持名を評
こしたるまよといふを恩賞なり 未承
政而
同位
而の
あま人をいふ
但 人のよりし付名よ加りてし恩賞なり
福せたる間いあま美名の名を 免 願ふ
然しともあま美名を評せしむ所名の持名を

許さるるたゞひなきは、未だ新を大守と人
なるすゆるく是利殿の頭ハ大右諸家あり
幕府の制よりなるをて老臣等此次ふを以
此職をまことしとてきりぬれと具申すハ一族
老臣たるもの身よりをさうけぬるもきりて
各家の法一極なるは織田家覇業をな
すふものくち等急用を等してまのちとせぬ
しぬふ意族筋次の撰より及も法あると併し

大老

運此きりりしむるありしと老老とまのちと
の分別なく才略ある者此位以下の仕事を
仕法きりりりり豊臣家の時より理
てま法別り備をけきハ大仕の職を三等
と大老中老なりといふる色分く仕法を
述きあるは、ある色もおのつりし職名
家所の古風かた入り
大老ハ執権許定あり
類ハ中老なりハ武許
定あり付等ふ
似るはなるを
あまのりも以後大右諸家あり

用人、出頭人
雜掌人

武家名目抄第十五冊

武家名目抄第十六冊

職名部七下

用人

吾妻鏡云治承五年四月卅日乙亥遠江國
淺羽莊司宗信依^安田三郎義定之訴雖被
^一取^二公所領謝申之旨不^三等閑之間安田亦執^四
申之仍且返^一給彼莊内柴村并田所職畢是
子息郎從有^二數尤可為^三御要人之故云々

又云元仁元年六月廿八日前奥州禪室平
去之後世上巷說縱橫云：武州御方人
粗伺聞之雖告申武州稱為不實歛之由敢
不驚騷給剝要人之外不可參入之旨被加
制止之間平二郎左衛門尉尾藤左近將監
關左近大夫將監安東左衛門尉萬年右馬
允南條七郎等計經廻太寂寞云
又云仁治二年九月七日壬辰有臨時評定

為出羽前司行義奉行細工所輩恩澤事有
沙汰野世五郎并領相摸國横山五郎跡新
田垣内等是細工故日向房實圓本給地也
女子頻雖申子細付藝能充給訖今又為御
用人分勿論云

為津文書是利為氏贈為津左京進入道於云
東大くもけやうすかたあうすくれい
せいふはしあひいふくそのあんとるり

城田樂猿樂遁世者マテ是ヲ引與ヘケル
間此人ニ増ル御用人有ラシト未見エ夕
ル事モナキ先ニ譽又人コソ無リケレ
世鏡抄云主從契約深重輕淺之事主君ハ
如何ニモ如何ニモ郎等若黨ニ至ル迄モ
情深カレ刀ナカウシ人ニハ刀ヲ與ヘ貧
者ニ分田地ヲ與ヨ能者ニ詞ヲ加ヘ用ヒ
仁者ニ情ヲ懸ケ忠ヲソ必テ不忠ヲ可裁

断所領配當ナキ侍ニハ縦二度三度不捨
一命共誠ニモ誠ニモ我非ト是ヲ可耻普
代相傳ノ侍一處懸命ノ地ヲ領シテ遁死
所及耻辱ニハ縦用人ナリ共後代ノ鏡ニ
堅ク致成敗子ノ孫ニマテ此ヲ不可召仕
但ニ連々抽忠勤致粉骨ナラハ様アル侍
ト心得テ不可行科是ヲ侍ノ大法トス
初井日記云 丹波家織田上總介カ勢朝倉
評定條

家滅亡ノ後ハ竜ノ雲ニ昇ルコト夕陽ニ
今ハステニ東ハ遠州參州ヲカキリ北陸
南海畿内一圓ニ取テ近年ハ内裏ノ御
用人二十リ征夷將軍ノ宣告マテ夕七
天候ハ一入威臣強クナリ云々
按信長
將軍乃
宣名蒙リテ天下の諸侯と進退も亦中將軍ノ
故也
天正事録云御花見ノ次第御催夥シキ様

躰也中御構ノ入口ニハ山中山城守中村
式部少輔人ヲ撰是ヨリ奥へ御用人ノ外
ハ出入無之云々
當代記云慶長十二年閏四月八日越前中
納言秀康逝去翌日古秀康公内永見右衛
門追腹ヲ切同秀康主内本多伊豆守是モ
可自害旨思立所自大御所被下知被留畢
是萬端ノ用人也十四年五月十八日淺野

職名ハハあると云ふを世を経る福ヤウて
一職の名ハあると云ふなりは世と後世と
一家の制度ハあると云ふ家老ハあると云ふは
何して間職の如クハ定まると云ふハ家ハあるは
いふハあると云ふハあると云ふハあると云ふハ
有用の義より出する名ハあるハ古クハ才藝ハ
はたさると云ふハあると云ふハあると云ふハ
通する有れば此と云ふて其階級ハヤウて老臣と云

外立あるはつと云ふ職と云ふは能くも元才選の職ある
と云ふは世家譜等ハあると云ふは能くも登庸と云ふ

出頭人

康富記云嘉吉二年八月廿八日丙辰或語
云飯尾肥前入道永祥者評定衆也去廿二
日御評定始日与頭人波多野出雲守座席
令相論也為評定衆上者任位階上首可著
頭人出頭上之由肥前申之出雲申云雖為

衆為奉行人之間不可著頭人上候間可著
肥前上之由出雲守募申之云云
永享記云 三浦介 公方持氏同十六日未刻
武州高安寺へ御動座ナリ御留守ハ警固
奈先例ニマカセテ三浦介時高ニ被仰付
出時高思フヤウ先祖三浦大介右大将家ニ
忠アリシヨリ以来代々功ヲ積テ御賞翫
他ニ異ナリ然ニ當御代ニ成テ出頭人ニ

ナホエ劣リ内々面目ヲ失ヒ無念ニ思ヒ
ケル處ニ云々
鎌倉大草紙云成氏ニ冥忠不對一列儀ナ
ト云々出頭人輩ツツト上杉安房亦被亡者
不子孫多クハ知ラズト云々
あやう記云々
東亂記云 太田最 上杉家ノ出頭人評定ノ
輩トモ太田入道扇谷ノ執事トシテヨク

ツ心ニ任セタル吏ヲ猜ミ境ニ著テハ吹
毛ノ咎ヲ争テ讒言シケル吏度ハナリ然
レ凡扇谷殿定道灌無テハ誰カ天下ノ乱
ヲ静ムル者可有トタニコトナク被思ケ
レハ少クノ咎ヲハ耳ニモ不聞入只佞人
讒者ノ世ヲ乱ヘキヲ悲ミ玉フ間道灌ノ
出頭モ弥メツラカナリ
應仁記云武衛家元父ノ讎敵幽魂ノ鬱憤
騷動條

ヲ思不知公方ナレハ私コソ上意ニ違凡
各々ハ身ヲ謹テ出頭衆ヲ頼顯負ニツカ
ハ不可苦云々

應仁略記云京中上下誰ナトあき^{大御事}
平妃天下静あ^角とあ^とと^と何な^ん於
上^れ事^事有^つと^と私^私語^語き^ある^事業^の如^く
夷^夷社^社と^如く^山名^名の^入き^山法^法坊^坊お^頭の^事成^成中^中沙
法^法と^乞と^始と^と唐^唐子^子悲^悲願^願の^争心^心不^不願^願未^未遠^遠乃

背憤我之ノ一と折を伺人顔いよと云ふる
又之京中にて心た〜一つ〜安堵の心
か〜まのき〜義敏出頭の後ハ一条と云乃少治の
左取の〜亭と云方清後某年始
端午出仕〜

庶仁私記之今出川殿清身義視上〜依子細
時斗略伊勢國司館下中暫清存ハ就其

色〜依有難説以上意儀聊事無故有清入
洛而月出度刻又為上意伊勢守有出頭然
間今出川殿上様念恨忍出指比叡山清度
候款方類持内書語中乃有清同心

江北記云文明十七年秀隆去宇治ハ引籠
乃與与一為各代清形極ハ本頭〜
終〜各〜扱吳見あり如抄あり

拾芥抄記云永正十六年十月十三日可有叙

位之處就有_下細川六郎澄可出頭之沙汰被

仰出武家御動座之儀仍_旁御延引也

中國治乱記云大内殿富貴其頃天下二無

雙也相良遠江守藤原武任卜尾張守多々

良晴賢兩出頭也

大館常真記云天文七年九月朔日臨時清

内院有之仍日事_豆荒祀_州海老_州佐州

本常州素條依ハ不常事在_州依不_州今日より等出頭

大館文書之考札令詳見_州仍去八日_州出頭_州

目_州度存_州為_州禮_州使_州者還_州台_州迷_州感_州此_州表_州如

存_州分_州中_州身_州存_州之_州考_州下_州十_州八_州日_州出_州頭_州十二月十二日

大館之_州送_州介_州殿_州系_州以_州館_州松_州永_州澤_州正_州忠_州久_州秀_州

三好記云高國生害之後晴元一統_州シ_州テ_州何

事_州カ_州ア_州ル_州ヘ_州キ_州ト_州諸_州人_州悦_州ヒ_州思_州ヒ_州シ_州ル_州ニ_州天

魔之所行ヤ_州ラ_州ン_州晴_州元_州之_州出_州頭_州衆_州可_州竹_州齋_州後

三_州号_州宗_州三_州好_州神_州五_州郎_州木_州澤_州左_州京_州亮_州卜_州三_州好_州筑_州前

守元長其間不快ニテ晴元ハ元長之事ヲ
色ニ讒言申ケル也
又云畠山上總介義宣ハ晴元ノ姉婿ナリ
三好ハ數代忠功ノ舊臣ナリ此人々ニ今
參ノ出頭人木澤ニ思ヒカヘ給テ晴元ノ
心ノ程コソ淺謀ナレ
松平記云永祿十年の七月駿河國小風流乃
おととやリ法人為くあつととあつとと

乃出頭人三浦右衛門依孫外是代好む乃氏志
へとき先中ハあつととあつととあつとと
ソ
當代記云天正七年九月廿一日攝州ハ信
長出馬シ玉ヲ去十七日信雄伊賀國へ被
相働失利拓植三郎左衛門尉討死ハ由有
注進是悉皆出頭人也信長大ニ令腹立玉ヲ去
播州征伐記云長治被切腹三宅肥前入道

首丁打落入道呼曰此前預御恩輩雖多之
此時御伴申人無之某怒生家之歲寄更
不及出頭述懷雖餘身御介錯之人不見之
然者御伴申腹十文字切割縲臙死一
初井日記云信長卿丹波家名又丹波國中
ノ旗頭家筋トモ一々尋子ラレ候須知殿家
家ノ事ヲ段々ニ被申上候信長モ丹波家
ハ士ノ事ヲ聞カレ驚入武井法印ト云代

筆ノ出頭人トモヲ召候テ書付ニ致サレ
テ候

又云遣攝州忍者信長公陣所取沙汰言上條信忠角藏カ笛ヲ

聞レ候テ師匠ヲ御尋アルニ表具屋ノ太
郎ハト云者ソトアルニ京都ノ者ト申上
ル謡ヲモ仕リ今様ヲモ諷フ程ニ御感ニ
預リ切々召出サレテ殊ノ外ノ聞人ニナ
リ出頭シテ候ホトニ高賣ヲモ止テ方々

へ出入シ金銀大分ニ賜リ福者ニテ候

甲陽軍鑑云 純云々 かく馬嫁ある大將條

奉公人上中下有ふ炊子と見せよお代より此家老

ありし人ありし人も當時乃出頭人より若ハ

支らばやえしと云ふ事と存し出頭人にてあ

まことお心より中 中 熱刺ふ事ある者虚云々云々

伴人戯也此大名此馬嫁なる事より少くも此

法云々戯也 八 出頭人 云々 熱刺 云々 虚云々

同發端云此一家此家老此出頭此熱刺此大

身此振舞舞の事此必ず此お代と此云々也云々

之人此云々此云々 一 此云々の為也

由良家傳記云家族并家老出頭者と非理不

お云々ハ其以下お云々此云々も片方斗其

事より此云々 一

又云出頭人ト云ハ其云々 一 此云々夜之君の

此云々此法才是此端能者云々此云々入云々此云々

此考もきよのふ限程ふ威勢と云作舟久委お老
と追たふし一ふ中たふしきふ用心と云ふきよの
立しゆゆふふふふふふふふふふふふふふふふ

伊達日記云大崎義隆家中ニツニ分候テ
政宗公へ申寄候根本ハ其頃大崎義隆ニ
奉公ノ小姓新田刑部少輔ト申者之事之
外出頭仕候然處ニ如何様ノ表裏ト候哉
本ノ様ニモ無之候サリナカラ被相隔候

儀ハ無之候

張樂お語云ゆきとあしう今時お頭志くゆ前と
く糸とく首とけゆきハ今たきあきとくあむ
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
糸ハ無用の事とく助あしゆりる涙あきハ
我の首討く糸ハゆきとくゆきとくゆきとくゆきとく
ゆきとくゆきとくゆきとくゆきとくゆきとく
小物事と云川まりゆきとく田中及事乃子

三成

細成中... あり... 理... あり

あり

多聞院日記云文禄二年四月三日淨勝寺

ヨリ久後河玉二逗留子細ハ兄ノ東房嘉慶此内

分 彼玉一系知以舟云万石ノ越代官事ノ交

東カ出頭ヲ古流精ニテ毒害ノ方下向了

大友無廢記云 朝鮮國ノ越代 其れ云出以

人 龍ノ少院ニありあり 委命ノ内 有

ハ義素をいふらん 國ニハ 國ニハ 國ニハ

小松軍記云利長即金澤ニ下テ國中ノ制

法ヲ出シ非常ヲ正シ忠功ヲ賞シ政道ニ

私ナシ然レハ上下喜悅ノ思オモヒヲナシ家老

出頭人ハ門前ニ市ヲナシ遠侍匹夫ノ族

ハ推擧躋拜シテ三ノ國ノ諸士群參云

氏郷記云綿利ハ右衛門卜云ハ故氏郷ノ

出頭人也蒲生四郎兵衛卜中惡カリシカ

或時四郎兵衛須賀太左衛門大塚七右衛門等ヲ語テ亘理ヲ討テケリ按此等ノ語ハ長原ノ事ナリ

松原自休手録云慶長五年六月十六日內

府大坂出馬一日伏見滯留ノ中景勝力家

臣直江山城守豊光寺允長老へ送一封之

書簡帖ニ云ク中增右大刑少御出頭之由

珍重候用處之儀候ハ可申越候云々ハ

當代記云慶長四年閏三月七日石田治部

江州佐和山へ移藝居不此間ノ就言莫令

氣遣ノ間三河守秀康被送路次是依内府

公仰也此石田治部ハ太閤ノ時無類ノ出頭人也十三年八月

舊冬就火災正二月方ノ音信無披露中略

塵取十松倉豊後守大和一綸子卅片桐市

正大坂當時出頭人已上奏者番石川主殿頭

慶長手録云慶長十五年閏二月二日越後

國堀監物同丹波足助但於後府本丸及對

决自去_二年_一足_レ才不_レ和丹_レ後自_二去_一年在_二江_一户_二專_一
後府_二江_一户_二お_レ語_一お_レ頭_一人_二企_一事_二持_一目_二安_一言_一
十六_二年_一十月十日大_二久_一保_二加_一賀_二守_一於_二小_一田_二原_一
死_一去_二此_一仁_二無_一雙_二心_一出_二頭_一人_二控_一勢_二言_一以_二後_一天_二性_一
考_一つ_二う_一不_レう_レ知_レま_レく_レ之_レ思_レ惠_一と_一し_レん_レ然_レ歎_レ送_一
或_一い_レた_二と_一人_二お_レ後_一と_二お_レ知_一勢_二言_一て_二支_一配_二方_一政_二方_一
へ_レと_レ引_レて_二下_一小_二田_一原_二へ_レ馳_一り_二て_レは_一内_二内_一前_二古_一屋_二知_一貞_二私_一記_二云_一慶_二長_一十九_二年_一大_二坂_一清_二陳_一心

若_レ権_二現_一様_二清_一法_二老_一中_二本_一多_二上_一野_二介_一松_二平_一右_二満_一井_二七_一年_二大_一岡_二兵_一藏_二清_一奏_二者_一著
満_二門_一大_二夫_一板_二倉_一内_二信_一正_二秋_一元_二但_一馬_二守_一出_二頭_一衆
伊_二奈_一筑_二後_一守_二満_一井_二七_一年_二大_一岡_二兵_一藏_二清_一奏_二者_一著
城_二和_一泉_二守_一
下三人
略之
又_レ云_二大_一坂_二龍_一城_二之_一良_二龍_一人_二数_一右_二岡_一之_二時_一分_二ヨ_一リ
有_レレ_二者_一在_二羽_一柴_二河_一内_二出_一頭_二人_一十_二リ_一元_二志_一毛_二利_一河_二内_一
親_二類_一也_二河_一内_二跡_一ヲ_二續_一シ_二岡_一ヶ_二系_一之_二時_一分_二石_一田_二治_一部
少_一一_二身_一身_二ヲ_一隠_二シ_一居_二候_一秀_二頼_一之_二石_一出_二大_一坂_二ニ_一テ_二者_一

物頭袂兜禪ル

義光物語云

修理大夫
生害條

嫡男修理大夫義康公也

近く被召仕し者に倭人阿順の臣ありて義光公

に上りて次男駿河守殿の数年江城に涉誥

ありて家一公に涉誥出以し由承及此の間何と

義光公涉誥意も以て如此候やと色を智不候

智様くし申云く

武林往昔日記云或和尚云樂五半と眼耳

鼻舌心意此六境界より起る事なりとされ

大名の家老等行出以人と立立くとりて

さゆす八洞寶なり事なり縦ハ四奉行ハ柳権

楓松と主君是誠賞覧しる

按出以人の譜等ありて阿道新系も阿れ登用

されく常々君道も昵近し改替り禪不

者をいふとて此出以といふ家の禪家ハ俗語

よりいへり禪よりて之意ハ評議の席以

思ぬへし今世に側用人兼用人ありといふは大方
出次人如志那の定まりたるものなり

雑掌人

吾妻鏡云建保元年十二月廿一日辛未明
春正月院飯事殊可令結構之旨被仰付雑
掌等近年度、雖有麁品之咎猶無刷之介
仍別及此沙汰行光奉行之二年五月七日
辛未園城寺田祿之間可被修造唐院并堂

舍僧坊之由有其沙汰以駿河前司惟義朝

臣豐前守尚友等為總奉行宇都宮入道蓮

生 山王社 並拜殿 佐々木左衛門尉廣綱 四足門 源三

左衛門尉親長 鐘樓 内藤左衛門尉盛家 預坊 已

下所被定十八雑掌也 梅か文よいとゆふ雑掌
二松あり初の雑掌ハ厨事を

はうさとのものをいひ後の雑掌ハ各禎の
取くを修理するに雑費を出し人をいり

又云延應元年五月廿六日乙未前武州為

禪定二位家御得脱被積作善事 年二歳二 年二歳二

未_レ緩其中於彼法華堂之傍被_レ建_レ温室令_レ結
番薪等雜掌人每月六齋日可_レ浴僧徒之由
有_レ沙汰

又云寬元元年七月十八日甲午今夜戌刻
被_レ行_レ天變御祈泰貞朝臣奉仕御使式部二
郎藏人雜掌河野左衛門入道二年十一月
十六日庚午評定間經營事雜掌人等向後
故可_レ存_レ儉約之旨被_レ定_レ下云々四年二月四

日甲子御臺所御不例之間為_レ祖馬前司定

貞雜掌被_レ行御祈等

按_レ此七條の内雜掌人等ハ
尉奉薪等の雜務を_レ掌

りさしむ役人を_レ以_レ雜掌とのみある其
費用が出に_レのよて_レさしむ地主人の数を

新編式目追加云謀叛之輩為_レ宗親類兄弟
者不及子細可_レ被_レ召_レ取其外都雜掌國代
官所後等事者雖不及御沙汰委_レ尋明隨注
申_レ追可有御計之由自_レ關東所_レ被_レ仰_レ下也云
云寶治元年六月廿二日河内國守護代相

模守判

空華日用工夫集云永和五年正月十四日

黃梅使回自京師出命鶴霜臺判門田回書

書云將軍為平紀乱出府軍于東寺差撥諸

軍云

按判門田七關東執事上杉家の
雜掌子て京師小とるりたり

上月記云南方御退治條々康正二年十二

月廿日為入吉野山向于大和國宇智郡人

數着到間島彦太郎上月左近將監滿中村

彈正忠友

貞

堀兵庫助丹生屋帶刀左衛門尉

中村次郎丹生屋四郎左衛門尉魚住彦

四郎魚住主計助石地四郎中村安禪坊上

野小次郎

鳥居千代
松丸代

平瀬彦左衛門尉

間島
被官

小谷與次

中村彈正
忠被官

小寺藤兵衛入道

為大
和越

智雜掌

依藤彌三郎

為京都雜掌
被殘置了

明石修理

亮

京都雜掌

如此處造意趣中村宗通

兵庫助依

返忠一向不被入立之間暫經日數小谷與

次號忠阿彌以隱形之姿數箇度參于御息
所就種_二陳申_一西宮御氣色漸和猶以大勢
者御隔心之間殘討手入山中畢次年_{長祿}
十二月二日夜半丹生屋帶刃左衛門尉同
四郎左衛門尉於吉野與北山奉討南方一
宮同夜半於吉野山河野鄉奉討南方二宮
討手著到_二關島彦太郎_一御引_二宮_一上月左近將
監_{奉討}二宮_{御頸}中_{御頸}了_了中村彈正忠_{奉持}二宮_{御頸}中_{於路}次_{討死}

村次郎上野小次郎平瀨彦左衛門尉平瀨
小太郎小谷與次以上八人小寺藤兵衛入
道_{為大和雜}掌_{被遣}了堀兵庫助_{京都}明石修理亮_{京都}
雜_{依藤彌三郎}出_{張播州}三_{草山仕候}
季瓊日錄云長祿四年十二月廿四日肥前
國法泉寺諸山列之事次連判被申今晨伺
之御免許之由被仰出也東福寺奉行布施
下野并可被成可為諸山之列之御奉書之

事即召布施雜掌命之
長祿以來申次訖云正月七日大各外候元
法供元中候元出法也判門田系也
身一進上小判門田
每年今日園東管領上
於雜掌式日此分也
御對面次事三藏以相伴元國持元外候
公家八日野及同公家判門田攝家門跡典業
官外記略中次判門田掛清目也其換神ハ中次
乃内より清子と明中て清椽へ出通至
所出の白か庭上懸月也庭上のるる様
樂田樂なと懸月不と同之
又云二月朔日毎年今日元宛折紙進上

御對面次事三藏以相伴元國持元外候
公家八日野及同公家判門田攝家門跡典業
官外記略中次判門田掛清目也其換神ハ中次
乃内より清子と明中て清椽へ出通至
所出の白か庭上懸月也庭上のるる様
樂田樂なと懸月不と同之
又云二月朔日毎年今日元宛折紙進上

之事云々又國持と内不系と方々打紙を
上とハ必以早胡清對面以爲不以雜考を
上ハ冑中次庭上へ各出請れしにて清對面不
之次之間は多々今日尙系と元とくくを
上と後系と人々名字官と中入て各系
上とくくの中打紙と持系中事さのうらみ
之之

又云十月二日清為の六出仕と事云々吉良

及石橋及浪川及多々は及系以雜考以嚴
重中出也

年中定例記云八月朔日清憑禁裏極へ清
進上清使傳奏也返すも清使同前於家門
跡公家大名外極也依元惠番元頭人等以そ
外とくく進上地下元職人由牛洞河系
考と人考と乃考とく似合のもの進上大
和系元系良の門臨坊友と於雜考判門四

庄多心敵代官職事云由緒之地云度

忠節上中事也仍山吹奉如城小

又云文明十年八月廿三日壬子土波矣後

進上公方樣法古刀長馬河原毛乃走書狀也

馬方納之持是院抄進上公才樣一太刀

國法馬精毛乃走松田九月朔日

己未去古三日美濃院因時之被中入也返奉今

日出彼雜當信服与三左衛門尉宗隆法方山所

清月子如系法大刀吉法馬河原十三年三月廿

日甲辰山名皮年始山禮中雜當布施若公方樣

法古刀友武山乃走山所極乃走助乃走

五月十四日戌子京極友浦政短より年始山禮雜當

八系乃走極乃走乃乃走乃乃走乃乃走乃

乃走乃乃走乃乃走乃乃走乃乃走乃

職事八浦上乃乃走乃乃走乃乃走乃乃走乃

作出之赤杉殿在國之旨雜學友人 富田土佐守 上原次郎在邊

炎夜（女）之始布施中野守（貞）中（外）訪司代

同被召之此旨福作并無部少捕之（一）返進

以返事可言上之由各中（外）

大館常興記云天文七年九月二日裁前朝

倉方（一）公方柳（一）八朝進抄為以返抄右刀

一腰持（一）中（一）由兼及也進抄（一）以右刀以練

貫云（一）代千沙馬一足（一）代五進上（一）仍

涉返以右刀之外今一種（一）右中（一）以中不

審中（一）ハ去年以馬と未副（一）之處只以右

刀斗（一）て以座（一）中彼雜掌（一）中て以馬と之

不請（一）中（一）以先（一）以分（一）く以座（一）中（一）中（一）付（一）

と之（一）九年正月十六日涉右刀一腰持十

布之部少捕辛始以礼（一）之（一）進上（一）披露

狀（一）十一日雜掌（一）中井修持系也二月八日此

頃小日抄事取（一）肥前國有馬御字（一）義望中

不_レ修_レきく大友雜掌勝光古以書狀依方言へ也言
上波有馬ハ少貳被友人みくの中中し可
乃如何ゆの中尋下之如此被友人於事
實も此字淺不可然ハ此道為清原誠の中
中_レ之也十一年因三月十八日太刀一腰遊
依藏人尾州雜掌執之何歳次富誠也
安土日記云天正三年八月二日豊原ヨリ
北莊へ信長被成御越城取サセラレ御要

害被仰付云々越前國分八郡柴田修理被
下掟條々越前國中一公事篇之義順路憲
法タルへシ努々鼻肩偏頗ヲ不存可裁許
若又雙方存分不躰ニ於テハ以雜掌我々
ニ相尋可落著之莫

按雜掌とる雜事と毎とる義みくとと此
脚を神社佛寺乃不願又ハ官家の人乃庄
園等ふつけうとき辛負以下の雜事と沙汰

武家者少く武家の地次は少く不法うさ

吾妻鏡は寶治元年十二月八日有評定執諸國

地次号与雜掌相論有被一決之事所謂有限

年貢進濟之外於庄发百姓号名田畠者可進止之

由地次号申之有限給田加徵地次雜免号外於名田

畠下地者自往古本所進止之由雜掌申之任先度

沙下知可守率法之肯被作出云々と又建武成用

進加よ本不寺社領事方之施行停滯以人兵を行

緩急空經廿七日者任本條定經申訴之度忍道行

可申左右之由是日限可作不引身方但有限日數

已示諸方雜掌亦猥及濫訴者暫可被圖彼訴訟也

と阿るこれなり於古文書の中より證とす(き)き

多うれをくくくくくくくくくくくくくくくく

武家ハ少く定りくい職ハ多かりき

多し、厨事及山原薪等の雜費を命せら

ぬ、そのまは雜掌人ともいふ又雜掌とい

は、造り多し事あり、時折願及もて費

小給する職を命せる人を雜掌と稱す、此

は、又其時をさうして自ら其後程ありて

武家

徳倉紙作の武士少々の京師にて死後世を傳
頌し又徳倉より某地ある輩より海に付職を以て
在東より先 曰く又官家よりいふ 孝社願の
ころもあり

雅堂人等其領邑庄園より留りしと半を

承する不職小似るを以て諸家より此等

司あることたるもいふなり 但し其家承仕うとは
領邑より是のを雅

堂といひ氏多うたる事あり いづくは利成の時より
よあるするものと云ふなり

いづくは利成大進物馬場始りしものを

饗物引出物等もあやむる及び將軍家諸色

游行の時小尉半の雜費を結するたは

河出も之後領田職の行政たるもの其後

あるも人みそあたる所をも去り雅堂

いふ半徳倉の世に異あり 徳倉の世に將軍
家上座等の時狀

詔を以て徳倉を誦するもその心の中後又その所の地

政等の不徳あると其的行軍以下たる人々旅りの時

皆西あやした同一家所版の時よりいへば其意多

下旅りの節に皆徳倉の例に准して其所々の
中後世頌あるを以ていふ 又け頃ハ京師紙
時よりあるも雅堂といふ

作の大老諸家た人々雅堂の職を以て

あはれなる人 在色の時 雑学いふ
小るや 柳夢あり 又いふく ち私の雑学
をうけ ねらう たるは 且進退 ありいゆる
而も 指しふ ぶ類を 又いふく 在色を大
まらぬ ばあはく 本を 毎まらぬ ちあはれ の風なり
関東 後上 杉氏 いたる 在徳 ありて ちあはれ の政
勢を 指す たるは けい ありて 幕府の 命なる
所を ちあはれ ありて ちあはれ ありて ちあはれ ありて
雑学 ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
幕下の 氣を ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
家の ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

左宗

慶長は ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
て ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
名の 私等へ 招き ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
を ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
備を ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
ちあはれ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
事 ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

